

# 人生の主役になれる利用者さんを目指して

## ◆キーワード

- 1 主役
- 2 生きる力
- 3 タバコ屋のOさん

## ～馴染みの人・場所との再会～

徳島県・藍住町

いりょうほうじんにょううんかい

医療法人凌雲会

ぐるーぷほーむおやのいえ

グループホーム親の家

発表者：介護職員 平川 公大  
ひらかわ きみひろ

共同研究者：稲次正敬  
共同研究者：楠本美恵子 濱田廣美

平成17年12月1日開設  
2ユニット定員18名  
(併設事業所)  
小規模多機能ホーム親の家

(親の家基本方針)  
入居者は介護を受ける人ではなく生活の主役である。  
入居者の心の動きに共感しありのままを受け止める。

(はじめに)

グループホーム親の家(以下「親の家」)では、数名のターミナルケアの経験を糧にして、利用者さんへの「今しか出来ないことをする」、「今までどおりの生活を送る」ことの大切さを、日々噛み締めて利用者さんと接している。しかし、「親の家」内の人間関係では、出来ることが限られてしまう。それどころか利用者さんは、職員に支援されるという立場上、どうしても肉体・精神ともに受動的な立場になってしまう。このような状況の打開策として、「外に目を向けた支援」を目指して活動している。それは、利用者さんの「馴染みのある人・場所」に会いに行くという新たな試みである。その活動の現在に至るまでの成果を報告する。

(事例紹介)

Fさん95歳女性 平成14年12月脳出血にて自宅で倒れる。利き手足に麻痺、失語症、認知症。脳出血で倒られる前は、身の回りのことは全て自分で行き、困っている近隣の人の世話をするなどして、近所の人たちに慕われていた。

「親の家」内では、自分から思いを訴えられることが少ない。その溜まった思いのたけを、腹痛や「せこい」、「つらい」という言葉に変換させて、日中頻繁にトイレに行かれ、2人きりになれるその場所で、職員に愚痴として表現される。最近、何かのストレスを感じた時、気分が高揚して若返っておられる時がある。この時はとても上機嫌で外出にも積極的である。仲の良かった孫の結婚がきっかけに、家族との繋がりが減っている。長女さんとの関係に距離があり協力を得ることが困難である。

(具体的な取り組み)

気分が高揚し、若返っておられる時に、外出にお誘いし、生まれ育った場所へ行って見た。すると幼少時代の思い出、よく遊んだ場所、自宅があった場所、親がふすま屋の商売をしていたことなどを、嬉々として教えてください。

何度かの外出の後、長女さんに外出時の様子を伝えると、徐々にFさんが脳出血で倒れるまで長年住まれていたK町の詳しい場所や、そこに一番仲

が良く、毎日Fさんが世話をされていた「タバコ屋のOさん」という方がいることを教えていただけるようになった。そこで、FさんがK町について語られていた時に、「行かへんで？」とお誘いし、K町へ出かけてみた。突然の訪問にもかかわらず、近所の方々に笑顔で迎えられ、Fさんを中心に思い出の輪が広がった。「タバコ屋のOさん」の家にも上がり、10年ぶりの再会を果たし昔話に華を咲かせた(活動の成果と評価)

Fさんは、「タバコ屋のOさん」に会う前に電話をした時、「何かいるもんはないで？買ってこようか？」など能動的な言葉や、自信に満ちた表情が見られるようになった。またそのFさんの楽しそうな様子を、職員から長女さんに伝えることで、「私も、もっと母に何かしてあげたい」という声が聞かれるようになり、Fさんが、孫の結婚披露宴に出席することもできた。

(考察・まとめ)

「馴染みのある人・場所」とは、ご自宅・ご家族のことだけではなく、利用者さんにとって、重要な時期と一緒に過ごした場所・人々のことであると解った。それは、近所の「〇〇さん」であったり、毎日行っていた旦那さんのお墓であったり、若い頃の息子さんの社宅であったり、Fさん以外の利用者さんでも、時と場合によって様々であった。利用者さんの重要な時期に過ごした人・場所との再会は、喜怒哀楽を分かち合った思い出の地域・人との再会である。このような場面は、もしかしたら利用者さんの精神的な拠り所を呼び覚まし、自信を芽生えさせることができ、普段の生活の「生きる力」に繋がるかも知れない。自信を持って「生きる」こと、それは人生の「主役」になるということである。利用者さんが人生の「主役」になり、自分の人生に誇りをもって普段の生活を過ごし、そして最期を迎える。これは人間にとって当たり前のことである。それが、互いに助け合った、または世話をした大切な人との関係を再興することで、自分が人に頼るだけではなく、人から頼りにされる存在、つまり人生の「主役」であったことを思い出すのではないだろうか。